産学官連携イベントレポート

全国イノベーションコーディネータフォーラム2010
平成 22 年度イノベーションコーディネータ表彰・表彰式
（H22.11/29～30）

独立行政法人科学技術振興機構（JST）では、全国で産学官連携に従事するコーディネータのノウハウや考え方を共有しスキルアップを図るとともに優秀なコーディネータの育成方法等を論議することを目的とし、コーディネータのためのフォーラムを様々な形で開催しています。今年度は、昨年度に続き 2 回目となる「イノベーションコーディネータ表彰」の表彰式も併せて、静岡県浜松市のアクトシティ浜松・コングレンスセンターで 2 日間開催され、全国各地より270余名の参加者が集まりました。

＜11 月 29 日（月）第 1 日目＞

主催者挨拶はJSTの小原満穂理事より、来賓者挨拶は文部科学省　科学技術・学術政策局　科学技術・学術戦略官（地域科学技術担当）　増子宏氏、及び静岡県知事川勝平太氏の代読として静岡県経済産業部商工業局　局長　富山敬三氏　より行われました。

基調講演は「今後の地域イノベーションについて」と題し、文科省の増子氏より行われました。日本の科学技術政策、地域科学技術振興施策の背景、コーディネータ活動強化の取組みについて説明され、今後のコーディネータに期待する役割と地域の産学官連携のポイントが示されました。

■今後のコーディネータの主な役割

・科学技術システム改革に寄与すること（多くのシーズを実用化に繋ぎ、イノベーションに発展させ、日本ひいては世界の文化経済社会に貢献する）
・プロジェクトプロデューサーとなること（基礎研究から産業イノベーションに繋がる目を見出す、大局を見据えたプロジェクトの創設、イノベーションへのシナリオを描く）
・プロジェクトマネージャーとなること（大局を掴み方向を示す、大学等の研究を開発研究可能な機関へ移管する、教員を含めた人材育成を行う、研究の進捗管理、国際競争力に必須である知財や契約の啓発を行う、競争的資金獲得やネットワーク構築等の「手段」を「目的」にしない）

■地域の産学官連携のポイント

・明確な目標に向かって施策ツールを早い段階から総動員させる
・産学官各セクターの個人の「やる気」「本気」「熱意」をいかに引き出すか
・3 者が一体となって、研究開発戦略、知財戦略、事業化戦略を三位一体とした戦略づくりを行う
・優れたシーズと企業との真のマッチングを行う

特別講演Ⅰは「日本が何で稼ぎ、何で雇用するのか－地域からのイノベーション戦略とコーディネータの役割－」と題し、東京理科大学特命教授（前経済産業省　地域経済産業審議官）　塚本修氏より行われました。日本経済の実相、企業の課題、産業構造の方向性について説明され、特性に合った多様な地域の発展パターンとして 5 つのモデルを提示、コーディネータは「地域イノベーションの総合プロデューサー」の役割を果たすべきと語られました。

■地域発展パターン 5 つのモデル

・国際競争力拠点化モデル（先導的モデルクラスターの構築など）
・地域産業集積高度化モデル（地域に根差した産業クラスターの構築など）
・新地域基幹産業育成モデル（地域の核となるものづくり企業の一層の強化と効果の波及など）
・観光交流発展化モデル（観光集客交流など）
・地域生活課題解決モデル（高齢者総合サービス、生活インフラ事業、ソーシャルビジネスなど）

引き続き、「イノベーションコーディネータ表彰」の表彰式が行われ、イノベーションコーディネータ大賞・文部科学大臣賞を受賞した鈴木康之JSTイノベーションサテライト静岡科学技術コーディネータ他 10 名の受賞者が受賞コメントを述べられました。

今年度の受賞者

＜11 月 30 日（火）第 2 日目＞

特別講演Ⅱは「歴史は事実を物語り、事実は未来を創れる」と題し、財団法人浜松地域テクノポリス推進機構　理事長　津田紘氏より行われました。自動車メーカーと省庁の会議を兼務してこられた実績に基づき産学官の昔と今について説明され、支援・推進機関の「見える化」を指摘、ビジョンを持ってイニシアティブを取るトップが必要であること、“新産業創出”や“産業構造転換”などの言葉だけが上滑りしないよう、地域の“連携”というよりも実態ある“協業”として“クロスカップリング（触媒）”の機能が必要であること、などを提示されました。また、コーディネータの姿勢について、学際、業際、境界こそ潜在需要の宝庫であり地域の産業構造の違いを超えてこそ眼力が試される、事業の関係者を満足させ、成果という“価値”をバックに堂々と報酬を得よう、と述べられました。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、講演を行った津田氏、JST産学官連携ジャーナル編集長登坂和洋氏、(株)GFN代表取締役　五味由紀子氏、コーディネータ大賞を受賞した鈴木康之氏、奨励賞を受賞した東京女子医科大学　先端生命医科学研究所　客員教授　チーフ・メディカルイノベーションオフィサー　江上美芽氏、の5名をパネリストに迎え、東京農工大学　大学院技術経営研究科　講師　藤井堅氏がモデレーターとなり「これからの産学官連携とコーディネータの役割」と題して討論が行われました。登坂編集長はここ数年の潮流として官制の産学連携と自然発生的協調が融合しつつあることなどを提言、今後の課題として、イメージの統一、自治体の首長の重要性、大学の存在感や情報発信力の3点を提示。五味社長、鈴木コーディネータ、そして江上教授は、それぞれの活動の経験を通してコーディネータの資質と役割を訴え、科学技術イノベーションを実現するために必要な方策が提言されました。

会場からも、業務トップの重要性、組織を超えて動くことの必要性、経済的効果を出口に見据える大切さ、組織の自立化等々多くの意見交換が行われ、日本独自の制度と言われるコーディネータの役割の重要性を再認識する場となりました。ディスカッション終了後、JST小原理事の閉会挨拶にてフォーラムは盛況のうちに終了しました。

パネルディスカッション壇上